法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-02-26

【書評】 牧野英二［編］『東アジアのカント哲学 日韓中台における影響作用史』（二〇一五年、法政大学出版局） 忘却されてきた遺産

YAMAMOTO, Eisuke / 山本, 英輔

(出版者 / Publisher)
法政哲学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政哲学 / 法政哲学
(巻 / Volume)
13
(開始ページ / Start Page)
53
(終了ページ / End Page)
54
(発行年 / Year)
2017-03-20

【書評】

牧野英二［編］『東アジアのカント哲学　日韓中台における影響作用史』（二〇一五年、法政大学出版局）

忘却されてきた遺産

山本英輔

今年（二〇一六年）は、イギリスのEU離脱のニュースが世界をかけめぐった年であるが、こちら東アジアと言えば、EUのような共同体ができるどころか、いまだに冷戦時代の構造を残しつつ、しかもそれより一層複雑な情勢となっている。国家同士の反目しあう姿勢は冷戦時代よりもやっかいになっている。こうした時代的状況を踏まえて、本書を読む必要がある。というのも、この『東アジアのカント哲学』は、この状況に対するメッセージにもなっているからである。

日本、中国、台湾、韓国という漢字文化圏のそれぞれの地域で、カント哲学がどのように受容され、相互に影響し合いながら研究が展開されたのかということが、本書の主題である。この主題をそれぞれの地域の五人の研究者が共同で研究し、その成果がここに纏められている。とりわけ、日本が与えた翻訳の影響や、新儒家たちのカント哲学の受容が大変興味深い。漢字文化圏におけるカント哲学の受容史研究自体、忘却されてきた遺産を掘り起こすという、これまでなかった試みであるが、しかし本書は、いわゆる狭い意味での「カント研究」にとどまらない意義を持っている。

どういうことかと言えば、確かにカント哲学の受容の歴史が論述されているのではあるが、それを通して、広くこの文化圏における西洋哲学研究の歴史が浮き彫りになってくる。漢字文化という共通の、そして交流してきた土台を持ちながら、実に異なった形成過程があるのである。

本書は、東アジア地域が直面した「近代化」問題への歴

史的哲学的反省を促すとともに、このような反省を通して、「いま・ここで「哲学」はなにを語りうるか」という、文字通りラディカルな（根元的な）問いを突き付ける。西洋哲学だけを専ら崇拝対象のように追い求めるのではなく、また逆に、西洋哲学に対抗して東アジアの思想を賞揚するのでもない。哲学的思想的問題そのものに向き合うことが何よりも大事なことであり、そのために、先哲の思想を読みかつ翻訳する営みがあるのである。その意味で本書は、編者が願っているように、カント研究者だけでなく、カント研究者以外の人々に読まれるべきである。

なお最後に、本書の上梓は、編者が中国、台湾、香港、韓国の研究者たちとのネットワークを作り上げ、不断に交流しつづけた努力のうえに、成り立っていることを付け加えておく。東アジアの恒久平和があるとすれば、このような国家の枠組みを超えた交流の積み重ねにおいて他ないであろう。